

「感動体験」から「豊かな表現」へ

園長 篠澤 恵理

8月中旬から下旬まで、ふくろ幼稚園の子どもたちの作品を、王子駅にある「王子カルチャーロード」に展示しました。幼稚園で飼育しているモルモットやカメの絵は、実物を何度も眺めながら、「(よく見ると)こうなっていた。」「こんな色かな。」など、それぞれに感じた形や色彩に気持ちを向けながら描いていました。毎日世話をしている時に感じた、モルモットの柔らかさやカメの手足の強さなど、触れ合っているからこそ描ける絵となりました。表現の前に、心を動かす直接体験が欠かせないと改めて感じています。(ふくろ幼稚園のホームページに掲載中)

さて、子どもたちは、自分の作ったものや描いたものを「見て」と言って差し出してることがよくあります。「すごいね。」「かわいいね。」と伝えると、嬉しそうな笑顔になります。そして、作品の「どこが、すごいのか。」「どの様に、かわいいか。」など具体的に褒めると、気に入っているところや工夫したところを教えてくださいます。

幼稚園では、子どもたちの作品を見ながら「ここが難しかったでしょう。」「ここは、どうなっているの?」など、興味をもって聞いていくと、自分の作品をどのような思いで完成させたかについて話し、さらに嬉しそうな笑顔になります。中には、「聞かれたので今思いついた?」と感じるようなことを話す子もいます。子どもは、作品を媒介に楽しみながら会話を重ねる中で、自分の思いをもう一度振り返りながら、自分の作ったものに愛着を感じたり、自分の作品のよさに気付いたりして、思いを膨らませているのです。話を聞く側も「きっとここを聞いてもらいたいだろう。」と想像力を働かせて問いかけると、子どもたちは、目を輝かせて答えてくれます。

しかし、子どもの作品を見たときに、技術が足りないという目で見たり他の人と比べたりするなど、見る側の気になる見方をしてしまうことはありませんか?自分の子育てを振り返ってみると、我が子の独特な表現を前に理解が難しく、返す言葉を失ったり、余計な一言を伝えたりしたことがあったと反省します。子どもが求めていることは、「評価する」ことではなく「関心を向ける」であることを、頭では分かっている、我が子の成長を願う気持ちが先に立ち、つつい何か言いたくなる親心があったのかもしれない。

9月からの園生活が始まるにあたり、幼稚園では、子どもたちの心を突き動かす感動体験が得られる環境を多く準備しました。園庭の小さな築山には、クローバーが咲きそろい、小さなカマキリが住んでいます。ヒマワリや風船がずらの種取りもできます。秋野菜や花の栽培ができる環境も整えました。自分から体を動かしたくなる遊具も、新たに用意しています。心を動かす体験の先に、『表現』があります。幼稚園教育要領で示されている、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』の中の、『豊かな感性と表現』が子どもたちの中に育っていかれるように、教育内容を意図的に環境に取り入れ、子どもたちとともに心躍る園生活を創ってまいります。まずは、子どもの小さな表現にも、どのような思いが秘められているか関心をもち、具体的に認めることを大切に積み上げていきましょう。

《今月のめあて》

- | | |
|------|--|
| 4歳児 | ・園生活のリズムを取り戻し、先生や友達と触れ合って遊ぶ楽しさを味わう。 |
| こりす組 | ・友達と一緒に体を思いきり動かして遊ぶことを楽しむ。 |
| 5歳児 | ・自分の思いを伝え合いながら、友達と一緒に遊びや活動を進めていこうとする。 |
| もり組 | ・いろいろな運動遊びに進んで取り組む中で、自分の力を発揮し、学級のみんなで目標に向かって活動する楽しさを味わう。 |

今月の歌

☆ とんぼのめがね ☆

1 とんぼのめがねは
みずいろめがね
あおいおそらをとんだから
とんだから

2 とんぼのめがねは
ぴかぴかめがね
おてんとさまをみてたから
みてたから

3 とんぼのめがねは
あかいろめがね
ゆうやけぐもとんだから
とんだから

